

世界腎臓デーに因んで

琉球大学病院 保健学研究科病態検査学講座 教授 栗田 久多佳

コロナ禍も2年が経過し、社会全体で徐々に適応している兆しがうかがえるようになってきた、3月の第二木曜日10日は、世界腎臓デーです。

ヘルスリテラシーが低いと、腎疾患に関する情報へのアクセスがうまくできず、治療の選択肢が狭くなり、腎不全の予後が悪くなることが知られています。そのため、健康教育を促進し、ヘルスリテラシーを向上させようというのが、今年のテーマ、Kidney health for all: bridging the gap in kidney health education and literacy. です。

ヘルスリテラシー向上のための取り組みは、いろいろな組織で行われていますが、個人への行き届き方は格差がみられます。情報へのアクセス方法を改善する手段として、医療従事者の教育を充実させ、通院してくる患者さんへ直接情報提供ができるようにすることや、様々な、SNSを介して情報発信することで、個人への情報供給を改善することなどが提言されています。

さて、この2年は、コロナ罹患者発生数の谷間をみつけては、学校検診が進められました。学校検尿もなんとか順調に進めることができました。しかし3次検尿をはじめとする、学校検診の精査は病院への受診ができにくいという事情もあり、例年にもまして低くなりました。ただ、コロナ禍前も精査の受診率は、決して十分ではありませんでした。

多くの疾患が乳幼児期に診断され管理されていて、検診で見いだされる異常は、慢性的で軽症のものが多いことが受診率が上がらない要因ですが、ピックアップする私たちと、保護者の

間の意識のずれが感じられます。これは、ヘルスリテラシーが不十分であることの現れです。

小児期の腎疾患は、先天的異常や遺伝性疾患が多いのが特徴で、小児期にESKDになる基礎疾患の多くを占めています。これらの基礎疾患のある方、また低出生体重児など周生期に異常があった方は成人期の腎の予後は、悪い傾向があり、ESKDにいたることもあります。また、学校検尿で発見されるIgA腎症や急性疾患のHUSは、腎炎が遷延して成人期を迎える場合や、成人期になって腎機能が低下してくる場合があります。この方々は、思春期・青年期に成人科へ転科することが推奨されていて、移行医療にあわせて、本人のヘルスリテラシーを促しておく必要があります。

成人期のCHD/ESKDの基礎疾患の多くは、生活習慣病ですが、小児期に基礎疾患が萌芽している方も少なくないといわれています。このような方は、小児期に異常が気づかれないか、あるいは受診しないまま成人を迎えることになります。

文部科学省は平成26年度から「がん教育総合支援事業」を実施し、義務教育下でのがん教育をはじめました。まだ、十分一般的に広がってはいませんが、小中学校で教育されたことは、生涯にわたって身につく社会の常識を変革する力があります。学校検診をきっかけに、ヘルスリテラシーの教育もすすめて、将来様々な健康問題に対応できるようになることが必要です。

今年の世界腎臓デーのテーマから、学校でのヘルスリテラシー教育が想起されましたが、私たちもその場に関わっていければと思います。